智恵秤（ちゑのはかり）二号

天下一品

人品區別所

服部應賀著

定價三錢五厘

そも智者ハ萬事轉ばぬ前に杖をつけ
バ悔こと希なり愚者ハ己が心にたゝろを
もちひざれバ譬へ器物を破しても のちに
まさありさまハ何事も初てあやまる時その
不肖を省て其心をいたまでも忘れざれ
バ二度あやまつことなく殊にその意万
事に移れバ愚者の智者となるも他をまねて
ゐんじん吾心を師として萬の業にこゝろをうち
こまで自然大智の門にいるものぞかし

官許 明治七年三月十九日

智恵秤二号

戯述 服部應賀著

小人間居して不善を為し君子を見て厭然として其不善を掩て其善を著とも其肺肝を視が如くなるハ何の益もなきことなれバ誠にむべなるかなされバ人智試所に第一第二はそれや済第三番に呼る者ハ白波泥吉といふ小男にて眼ハ鷹の如くなるが何故にや額の汗をぬぐひながら智恵の秤にかゝりしが其量目百斤ある

に皆〻驚きけるうち局長褒美の御烏帽子を携へて
渠が面を御鏡に照し見たまひ傍に在る市兵に左右を守
固らせられてのたまふ「いかに泥吉汝は頗る智者なり
されば汝が幼年よりの智恵のはたらきつぶさに言上
すべし「泥「是を誠に恐入たるおもむき御覧のごとくの私
ぶぜい智者抔といはるゝおぼえもよもなし「長「イヤ〻此秤の目に
はかりまするうへは弁舌にても隠されぬあきらかなれ
ばいへ「泥「しかあらばへて童の時を申ばげん嗚呼がましくも
私は高き竹馬にてよく走り鐵胴の當独樂唄廻し面

打るぞも上手なりしが今其智恵目方にかゝるといへ
ども御烏帽子を頂く程のちゑともでんじ奉らねば
下品の白紙となりて早く御暇とくだし玉へ「長「扨く
汝を眼から鼻へ抜る智弁ある夫等を目方になるもの
おもはれども汝のは奸智と号して人を偽り利を得る
智なれば褒美をあたへ白紙とてもまさきとぞ汝が今の御
挺事にも友達の品〻をかぞへ取る事があろう「泥「ハア仰
のごとくおさなきうち手習にもきて他の紙筆をとりし
事もまゝありましたが成人となりては其心をかたく改

めまる長「イヤ〳〵一廉の奸智があればこそ百斤の目方が
あるハ泥「それでハいつぞや湯屋でうつかりと他の着類を
きて戻りましたことがおざる長「イヤそればかりでハまだ目
方に合ぬまでそのやうな事がいくらもあらう泥「ソレそ
れ〳〵此間抜裏をいきましたとき下物が風にとんで
肩にかゝりましたもしらん夫を持かへりまして賣ま
した長「ヲヽ夫等も人目を盗む奸智なれども上品の智
とハいはれぬまだ百斤にかゝる智恵のちからがなく
てハなられぬ泥「イヤそんなら聊もおざりませぬ長「なれバ是非

がないさらは汝が懐の品をたゞ是へ出せ泥「イヤ此紙いれの
うちにハ何もおきませぬ是を御免くださるべしと否む処
を市兵が取上てさしのぞきその紙入のうちより一封の
手紙を取いだし讀おはりてちると膝をうち長「イヤ泥吉
此手紙にて汝が智恵のほどやうやくわかつたさて先
頃我家へ旦那寺より急用の文通がきたる其文言
にも昨夜何者ともしらず御墓所を打倒し候間早
々御見分下さるべく且無人の折柄急使相頼候間御
氣の毒ながら使賃百匹此者へ御遣し下さるべく候と

認たれバ使賃の外に支度代までを遣し早速寺へ人を遣しけれバ跡方もなき偽其う人寺へたまさ我名前を以て風呂敷と傘を衒し者あり其時の手紙の文と汝が持し此手紙とハ同文同筆なれバ我家と寺のかたりを汝にきハまるその謀金銭をいさゝかなれども亢慮の及ぬ奸智のはさらき感心せり。いかに一坐の者達渠がごとき奸智の者又手をかへ品をかへて衒ともある事もやあれバ家族を勿論下女下男へも油断なくいたさぬべしさて此者を黒印にてハ免されねバすぐ

さま糺問所へ送るべしト下陣のかたへひかせける此折ふし外國人入きたりて局長の前へ行きて「それ今此所を通りながら表札を見るに大世界に二ツとなき智恵の稱にて人智を試とけるが吾多年究理學を弁励して天地間の理をきはむれバそがしにさつ智者ハ世界になきと思へども其量目何程なるか夫を云ることを希望す「一丈なめつともやもさとなるが見らるゝずバとく今日の試験人いまだ終ざれバ番外に加入すると成ださし明日来りなバ貴殿の智恵何程といふを

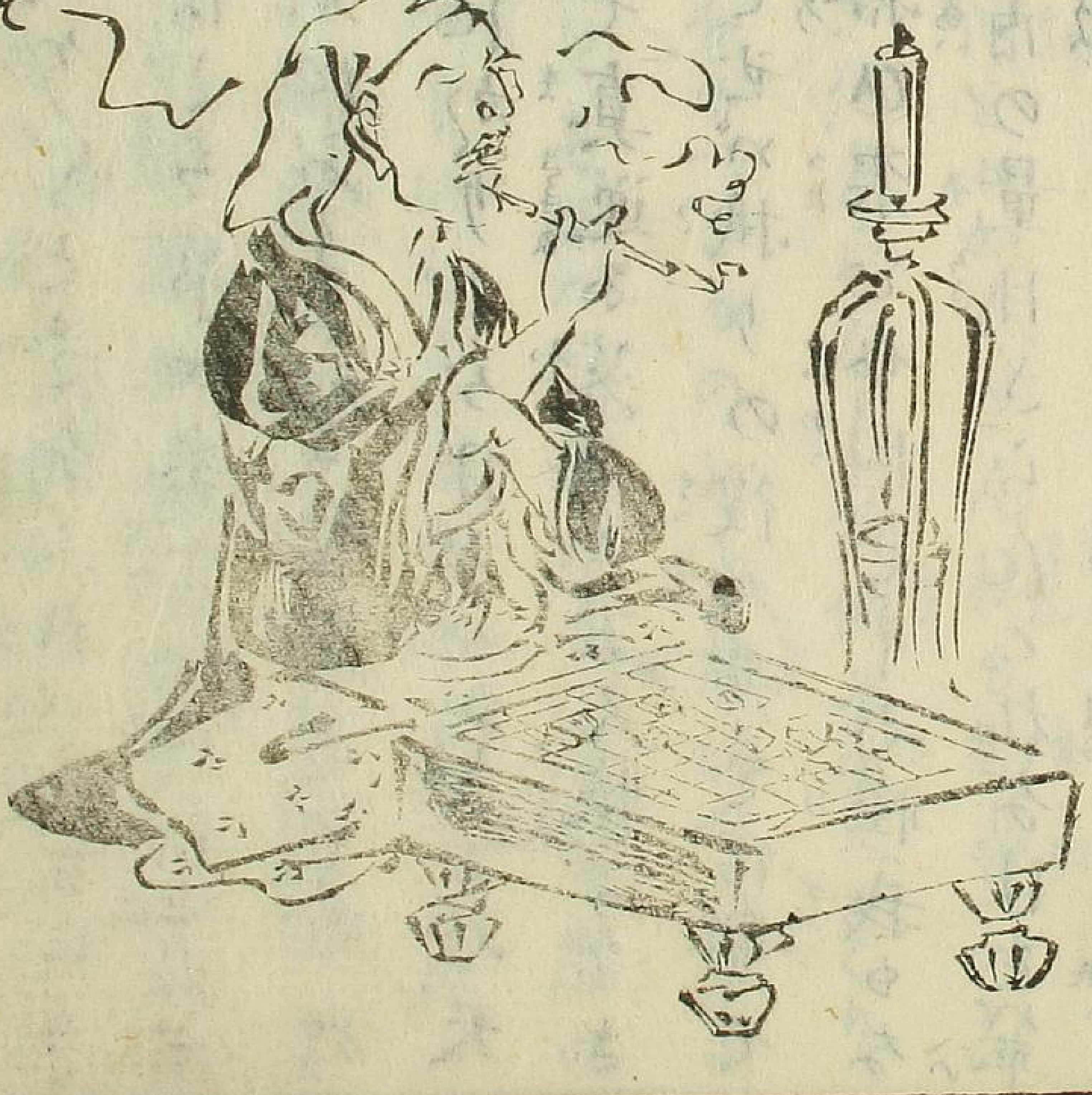
過分の送物ハ
後に利を得るの
知恵あり

「こんなうつくしい鯛とこさしのところへ反物をそえてやるがきつとさきへ百あがらせといふにちがひなゐるはつもりてみると川二分を百両で買てくれるかしらぬかもしれぬとおもへバたべてへさりますそへさるへる

惺々暁斎

盲人智眼をひらいて
将棊をよくさした

「此内がふゑてどうも火がきへるので将棊がみへぬからまつて居ろといふがハテさへ目わきまへねどふどかうるさいあめいるいぞ



試捨をすべし今日をペケ〳〵と手をふれバうるじき
すがら出てゆくその人とも第四番斉北内と呼わけ
らまて北内ハ鼻の先にぶらさがる智恵の全顔此
ふく〳〵しげに御秤にかゝりしが目方がなきゆへ天
井へはねあげらまて真逆に落るこゝん懐よりさ
まくの品をとりおとせバ掛りの役人声をかけて
笑ひながらそれを拾ひ渠を介抱せしに怪我もなく
けれバ大音に。斉北内の量目さらにこれなけれバ平
の字の朱印に候と呼ぞきく局長渠を招がれて「汝

がなりさま初より子細あると見る今取おとせし品く
いかになるぞ「されば何とらかくさん私も節貢のお
とく御烏帽子を頂きたくぞんじて俄に宅へもどり
何ゝ智恵の目方になるべきものと尋ねて持さる
品とロハ今取おとせしもそなハち是なり「ハテ智恵の
目方になる品とハ珍しいそれ」をなるんじや「されハ
文珠菩薩と辨天の御影でおざるそも文珠ハ智
恵のかたまり弁天ハ智恵弁財を守るといふを
いまだ御存じこれなきか「是ハ一段のおもひきシテ

そのたんなやの面を何とへにかつ「されバ大般若を
飜譯すれバ大智恵のことゝ承りましたとへ大ぞん
なやハ宅になきまゝ子供揃の小般若これも智恵の足
にもと持参をバいたしました「さてく聞ばきくほど
おかしいおとうなその外にも何もないか「イエまだ〳〵ありま
する此胴巻の中に古金と大札で千両腹にまいてお
りまする「それハまさ何の為にぞ「何の為とハ曲もな
い此世の中に何が貴ひとおふしさとて金ほど貴も
のもなけれバ大金を持バ愚者の私の方へも名高き

智者學者がおざつて旦那様えびやの福の神ドやのと
たつとむのを見るにつけ此世の中ハ智者ハ貧く
愚者ハ福貴とさとりました私その貧の智者を
願ふ望ハなけれども折ふしわの客ハ金をすてども
無智短才抔と影ていはれるが口おしけれバおのれ
やれ清貧獨福兼帯の身となりて御烏帽子を
冠さまゝに智恵の守りと身につけしが其功徳
さらになきハそもいかなるいはれなるぞか御教訓を
希ふ「てよくこそとひし都て福者をかさくなにて

一生をあやまりのもとなるが汝はすみやかに猿智恵を
捨て正身に智門の扉をひらかんとおもはゞ吾よくさと
さべしそも愚者は足事をしらねば天上へはかへる
までも慾心限りなきゆへ寝ても覚ても心を苦しめ
大金を残して一生を終れども其子其意を續ねば
家名を失ふ者まゝあり是子孫を見る智恵の眼
がなきゆへなりさて智者は足事をしれば貧なれ
ばひんにまかせて樂がゆへはらと腹をやむことなし汝が
家へ入込智者は衣食住に奢をつくせばはたまらぬと

口にはいへどさつしりはまつる大晦日智恵とふるなの
弁舌でも一夜が越ねば留守をはらひ年中愚者に
頭はあがらんそれで智者といはれまひ汝文殊弁天
の御影を身にはけで智恵の目方が増ものならば経書
箱を脊負ても學者になる大般若はらふつさと轉讀
風が悪广を除るば運にかいさ名蹟と見ても眼から血の
出るほどもおろうておゆかやく金持の衣を着さとて懐
へ金も涌ばさまば富も徳も其得る道ともつてせざればば
招ひても益なし汝今智恵の眼を开きなくばまづ兩眼

をまきのとして心をもつて物を観れバ見へぬ処も見へる
なり一事の悟八万事ふわたる會得もきしらとのたまへバ
有りがたさやく今日まで定理ふくらき闇純の身も公の
智燈をうけさせて開明の冥加の為此千両ハ學区へ献ぞ
れバ今一度御秤ふかけ給へと願ふまゐらせそれハち秤ふ架
て見れバ一りンなしの愚者の身も一念憤発の智恵の量目百斤ふ
頭ハれしかバ局長御烏帽子ふ添て長者の家名を賜ハりける

第三号　局長と外國人と究理の問答の条

智恵秤二号終

紀元二千五百三十四年五月

万亭先生新著述表題

智恵秤
白鼠水練
市虎狩
暁齋先生画

[illegible]

和談理解新文 二才圖笑 同
五穀祭 二号 画

世界中の[illegible] 全三部
世界大一帝ふ國へ[illegible]の滑稽

東京書林 仙鶴堂
浪花町 小林喜右衛門

010190524847